

孤高のウィザード

とあるP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孤高のウィザードと呼ばれた男がいた。

彼の名は「ヨハネス・鷹野」

彼は故郷カールスラントのベルリンを解放する為ウィザードになった。

そんな彼には他にも夢があった。

「大きくなったら、みんなのお嬢さんになる！」

これは、ベルリン解放を夢見る男の夢物語である。

目次

孤高のウイザード 設定集	—	1
第一章 501統合戦闘航空団「ストラ イクウイツチーズ」		
オペレーション	01	異国の地より
こんにちは	—	13
オペレーション	02	「アルプスの 魔法少女」
オペレーション	03	「結成ストラ イクウイツチーズ」
	—	32

孤高のウィザード 設定集

設定集

オリキヤラ

名前・ヨハネス・鷹野

身長・176cm

年齢・19歳

誕生日・1926年7月13日

出身・帝都カールスラント（3歳）↓横須賀（17歳）

通称・孤高のウィザード

愛称・ヨハネ

原隊・カールスラント空軍 第1戦闘航空団

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・大尉

使い魔・ジャーマンポインター

固有魔法・『メテオ・ストライク』（破壊系魔法の最上位。小型の隕石をある場

所に落とすことが出来る。但し、1日1回が限界)

使用機材・フォックウルフFw190飛行脚

使用武器・13mm MG131機関銃を2挺、懐にナイフ2本とモーゼルC96

モデル・ヨハネス・シユタインホフ

容姿・両目が青、髪は黒、筋肉質(但し、バルクホルンの『筋力強化』には負ける)、長身、体重はやや重め。常にスーツ姿でいたため、体型には気を使っていた。

一人称・私(但し、ミーナ、ハルトマン、バルクホルン、ウルスラの時だと俺になる) 弱点・汚れる事(割と潔癖症)

家族構成・母がカールスラント人、父が扶桑皇国人のハーフ

その他・幼い頃を帝都カールスラントの田舎町で過ごす。その時に出会ったミーナ、ハルトマン、バルクホルン、ウルスラとは幼馴染。

母がカールスラントで、扶桑皇国人の父と出会い大恋愛の末に結婚したが、19年経った今でもラブラブの関係は続いており、2人が誕生しそうな勢い。ヨハネスが扶桑皇国に行く時に「大きくなったらみんなのお嬢さんになる」と宣言していた。

そして、15歳で扶桑皇国海軍 遣欧艦隊第11航空戦隊 第7航空隊入隊。2年の厳しい訓練を耐え首席で卒業。その後はウィザードとして頭角を現す。だが卒業直後に突然「あてもなく旅をしたい」と言い出した。

このまま行けば出世コース間違いなしなのに何故かこの広い世界を見てみたいと言
い出した。

もちろん、親たちは反対した。しかし、頑なに「旅がしたい」と言い張る。ヨハネス
最初で最後の我儘に根負けした両親はヨハネスの旅路をOKした。

そして、旅先のロマーニヤ公国で先輩ウイザードのポルコ・ロツソに出会い弟子入り。
数が月だったがここでの出会いはネーデルランドの第501統合戦闘航空団「ストライ
クウイツチーズ」へ入隊する。密かにミーナとバルクホルンの事を思っている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

・第501統合戦闘航空団「ストライクウイツチーズ」メンバー

名前・宮藤芳佳

身長・150cm

年齢・16歳

誕生日・1929年8月18日

出身・鎌倉市

通称・「豆藤」「ちびっ子」

原隊・扶桑皇国海軍 遣欧艦隊第24航空戦隊 288航空隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」
階級・軍医少尉

使い魔・豆柴「九字兼定」

固有魔法・『治癒魔法』

使用機材・ヘルウエティア製ストラライカー（3期1～2話）山西航空機 紫電二二型

（3期3～10話）

使用武器・九九式二号二型改13mm機銃／ブレン軽機関銃／MP40

名前・ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ

身長・165cm

年齢・19歳

誕生日・1926年3月11日

通称・ピーク・アス（スピードのエース）

愛称・フュルステイン（女公爵）

原隊・カールスラント空軍 第3戦闘航空団

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・中佐

使い魔・灰色狼〔クラヴァツテ〕

固有魔法・〔三次元空間把握能力〕（感知系魔法の一種。一定範囲内の敵味方の位置を三次元で把握できる）

使用機材・メッサーシユミット Me163「コメート」（3期9話）

使用武器・MG42

名前・ゲルトルート・バルクホルン

身長・162cm

年齢・19歳

誕生日・1926年3月20日

通称・ヴァイス・フュンフ（白の5番）

愛称・トウルデー

原隊・カールスラント空軍 第52戦闘航空団 第2飛行隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・少佐

使い魔・ジャーマンポインター

固有魔法・『筋力強化』（念動系魔法の一種。他のウィッチに比べ桁違いに強化される

上、持続力が高い)

使用機材・メツサーシャルフ Me262 V1

使用武器・SAA

名前・エーリカ・ハルトマン

身長・154cm

年齢・17歳

誕生日・1928年4月19日

通称・「黒い悪魔」「カラヤ・アイン(カラヤ中隊の一番)」

愛称・「フラウ(大人の女性)」

原隊・カールスラント空軍 第52戦闘航空団 第2飛行隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・中尉

使い魔・ダックスフント

固有魔法・『シユトウルム』(攻撃系魔法に分類。大気を操作することによって自分の周りに暴風を発生させたり、変則的な機動を繰り返すことが可能となる)

使用機材・メツサーシャルフ Bf109K-4(2期)

使用武器・MG42S機関銃

名前・ピエレッテIIアンリエット・クロステルマン

身長・152cm

年齢・16歳

誕生日・1929年2月28日

通称・ブルーブルミエ（青の1番）

愛称・「クロステル」「ペリーヌ」

原隊・自由ガリア空軍 602飛行隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・中尉

使い魔・シャルトリュー

固有魔法・『トネール』（攻撃系魔法の一種。魔法力を雷撃に変換して放出することができる、クロステルマン家に伝わるとのことなので遺伝系の魔法の模様）

使用機材・V.G. 39bis

使用武器・ブレン軽機関銃Mk. I

名前・リネット・ビショップ

身長・156cm

年齢・16歳

誕生日・1929年6月11日

愛称・「リーネ」

原隊・ブリタニア空軍 610戦闘機中隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・曹長

使い魔・スコテイツシュフオールド「コンセルティナ」

固有魔法・『射撃弾道安定』（魔力量の増加、直進性増加）

使用機材・ウルトラマリン スピットファイアMk. 22

使用武器・ボーイズMk. I対装甲ライフル（ボーイズ対戦車ライフルMk. Iカナ

ダ陸軍

仕様）

名前・シャロット・エルウィン・イエーガー

身長・167cm

年齢・17歳

誕生日・1928年2月13日

通称・グラマラス・シャーリー

愛称・シャーリー

原隊・リベリオン陸軍 第8航空軍 第357戦闘飛行群 第363戦闘飛行隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・大尉

使い魔・ウサギ

固有魔法・『超加速』

使用機材・ノースリベリオン P-51D “ムスタング”

使用武器・M1918BAR自動小銃

名前・フランチェスカ・ルツキーニ

身長・148cm

年齢・14歳

誕生日・1931年12月24日

通称・「ガッツディーノ（子猫）」

愛称・「フランカ」

原隊・ロマーニヤ公国空軍 第4航空団 第10航空群 第90飛行隊

所屬・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・少尉

使い魔・黒豹

固有魔法・『光熱』（魔力を一箇所に集中展開して超高熱で攻撃）

使用機材・ファロット G55Sチエンタウロスペチアール

使用武器・M1919A6重機関銃

名前・エイラ・イルマタル・ユージェイライネン

身長・160cm

年齢・16歳

誕生日・1929年2月21日

通称・ダイヤのエース

愛称・イツル

原隊・スオムス空軍 飛行第24戦隊 第3中隊

所屬・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・中尉

使い魔・黒狐

固有魔法・未来予知（感知系魔法の1種。現状の行動がもたらすあらゆる可能性の中から最も確率の高い結果をイメージとして感じとれる）

使用機材・メツサーシャルフ Bf109K-4

使用武器・スオミM1931短機関銃

本名・アレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴヤク

身長・152cm

年齢・15歳

誕生日・1930年8月18日

通称・「リーリヤ（百合）」

愛称・「サーニヤ」

原隊・オラーシャ帝国陸軍 586戦闘機連隊

所属・第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

階級・中尉

使い魔・黒猫

固有魔法・『全方位広域探査』（感知系魔法の一種。短波を中心とした電波を発信・感知することにより水平線以遠までを探査することができる）

使用機材・ミール・ガスウダールストヴァ設計局 M i G I - 2 2 5
使用武器・フリーガーハマー

名前・服部静夏

身長・159 c m

年齢・14歳（1945年）

誕生日・8月18日

所属・扶桑皇国海軍兵学校↓第501統合戦闘航空団

階級・少尉

使い魔・四国犬

使用機材・山西航空機 紫電二一型

使用武器・九九式二号二型改13 m 機関銃

第一章 501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」

オペレーション 01 異国の地よりこんにちは

1945年秋。ここロマーニャに居たヨハネス・鷹野は師匠からある言葉をもらった。

「飛べない人間はただの人間だ……」

そう言っていた師匠の元を去り、はや数日。ヨハネスはロマーニャ公国から帝都カールスラントへ向かう蒸気機関車に乗っていた。しかし……

ドコーーン！

何処からもなく飛んできた砲撃音によって、楽しみの一つであった読書を邪魔されてしまった。しかも、相手は

「全く、人の読書を邪魔するネウロイには、ご退場頂きましょう」

そう言って、ヨハネスは読んでいた本レフ・トルストイが著した長編小説「戦争と平和」に葉を挟んで、大空にいる中型ネウロイに視線を向けた。幸いにも一体だけだった

のでそうそう、時間がかからないと思い、発進の準備をするのであった。

「すみませんマダム。外にいる害虫を退治して来るので、それまで、この荷物を預かってくれませんか」

「え、ええ…」

「では、失礼します」

「ちよつと！もうすぐでウィッチーズが来るからそれまで大人しくしていた方がいいわよ」

「ご心配には及びません。私強いので」

そう言つて、ヨハネスは最終車両に向かつていた。そこは貨物車両で色々な物資が入っていた。ヨハネスは木箱に入っていたストライカーユニット『フォツケウルフW190飛行脚』に両脚を装着する。

すると、ヨハネスの使い魔である「ジャーマンシヨートヘアード・ポインター」の垂れ耳と短いブラウン色の尻尾が出てきた。

「コンタクト!! (エンジン始動)」

そう言つて、ストライカーユニットに魔法力を送り込み、プロペラを回し始めた。

「回転数10000…12000…16000両舷バランスパーフェクト。ヨハネス・鷹野出撃します！」

両手に13mm MG131機関銃を2挺、懐にナイフ2本とモーゼルC96を持ってヨハネスは大空へと飛び立った。そう、彼こそ稀に出現するウィザードだったのだ。ウィッチと対になる存在。稀に魔法力の高い男性にのみ与えられる力。ヨハネスはそんな存在なのだ。

そうこう言っている間に中型ネウロイを発見した。流線型をしているネウロイは無造作に真っ赤なビーム光を発射してる。このままでは蒸気機関車に乗っている乗客たちが危ないと思ったヨハネスは、ゴーグルをかけフルスロットルでネウロイに追いつく。

「目標を肉眼で捕捉。それではいきますか。『E s i s t z e i t z u j a g e n! (狩りの時間だ!)』」

一気に魔法力を増強させ、プロペラを更に回転させる。両手に持った13mm MG131機関銃のトリガーに指をかけ、ネウロイに対して攻撃を行うのだった。

ドドドドドドド、ガガガガガガ

「さて、コアは何処にあるのでしょうか?」

ネウロイには「コア」と言うものがある。人体で言う心臓みたいなものである。そのコアを破壊しない限りネウロイは何度も、再生してしまう。

縦横無尽に飛び回り、ビーム光を避ける。途中近づいては離れを繰り返して、戦闘開

始から20分。

「！見つけました！」

そこには剥き出しになった赤く光る六角形の宝石の様なものがあった。どうやらあれがネウロイのコアのようなのだ。しかし、周りの部分が再生されていく。13mm MG 131機関銃を捨て両手を天にかざしある呪文を唱えた。

「仕方ありませんね。『我の手に集まりしものよ 顕現せよ。 太古の怒り 大いなる力よ その身に受けよ！ メテオ・ストライク！』」

すると、先ほどまで晴天だった空が一変、暗黒のごとく黒くなった。そして、ヨハネスが手を空にかざすとどこからともなく、隕石が現れた。ヨハネスの固有魔法「メテオ・ストライク」である。

その隕石をネウロイに向けると隕石はネウロイめがけて一直線に落ちて行きネウロイは爆散した。しかし、勢い余って隕石はそのまま落下を続け大地には大穴が空いていた。

ドコーーコーン！

「ああ、やり過ぎましたね……これじゃあミーナやバルクホルンやハルトマンになんて言われるか……まあ、今更ですがね。さて、戻って読書の続きをしませんと」

ヨハネスはそんな事にせずに、13mm MG131機関銃2挺を回収すると自身の荷物がある蒸気機関車に戻るのであった。

ここは、ベルギガ王国 サン・トロント基地。かつて連合軍第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」のメンバーであった2人は頭を抱えていた。

その2人とはミーナ・デイトリンデ・ヴィルケとゲルトルート・バルクホルンであった。そこに来たエーリカ・ハルトマン。3人共ともカールスラント軍で活躍してる戦友である。

「やってくれたな…」

「ええ、やってくれたわね…」

「どうしたのミーナ、トウルーデ?」

「どうもこうもないぞハルトマン。この記事を見てみる」

そう言つて、バルクホルンはある新聞記事をハルトマンに見せた。

「どれどれ…『○月×日。ローマーニヤ公国を出発した蒸気機関車の車線上に中型ネウロイが出現。同列車に同乗していたウィザードにより撃退するも、周囲には大穴が開いていた。乗客の一部は「晴天だったのに、突然空が暗くなり隕石が落ちてきた。この世の終わりだ」と証言していた。なお、このウィザードは駅に着く前に姿を消していたとい

う。』あくやっちゃったね…」

「ええ、まだ、ロマーニヤ公国とカールスラントの間で起こった事だからいいけど、これがネーデルランドで起こっていたと思うとね」

「それに、こんな馬鹿でかい穴を開けられるのはアイツしかいないからな」

「それじゃあ、戻ってくるのかな？」

「ええ、多分戻ってくるでしょうね『ヨハネス・鷹野』が」

彼こそ最高にして最強のウィザード。そして、ミーナ、バルクホルン、ハルトマンの幼馴染である「ヨハネス・鷹野」

これはそんな彼が、帝都カールスラントの首都「ベルリン」を奪還するまでの物語…

オペレーション 02 「アルプスの魔法少女」

1944年秋。扶桑のウィッチである宮藤芳佳はヘルウエティアに居た。

ヘルウエティア連邦は欧州中央の山岳国家でアルプス山脈がネウロイに対する天然の要害の役目を果たし、ヴェネツィア・ローマーニャ軍による欧州南方の防衛線が引かれている。

宮藤芳佳は第501統合戦闘航空団が、再結成されるまでの間医学学校への短期留学をしていた。

そんな時友達のアルテアがある人物が芳佳に会いに来たと知らせるのであった。

「芳佳ちゃん。お客さんだよ」

「え？だれアルテアちゃん？」

「扶桑皇国 坂本美緒さんだよ」

「え！坂本さん！」

そこに居たのは、かつての扶桑皇国のウィッチで芳佳を第501統合戦闘航空団にスカウトした坂本美緒が扶桑皇国第二種軍装の服装で立っていた。

「久しぶりだな。宮藤」

久しぶりに坂本美緒少佐と会えると思い、とてもびっくりしてしまい尻餅をついてしまった。

「坂本さくらん……ととと、あいた」ドスン！

「宮藤！大丈夫か？」

美緒は咄嗟に芳佳を助けようとした際に帽子が取れてしまい、美緒の美しい髪が露わになった。慌てて土方圭介扶桑皇国海軍一等水兵が帽子を受け取った。

「えへへへ、久しぶりに坂本さんの声を聞いてびっくりしちゃいました」

「全く……」

芳佳とアルテアは別れて美緒と談笑していた。帽子を直す美緒に芳佳は臆することなく話し始めた。

「あれ？髪を下したんですか？」

「ああ、もうウィッチになる事もないからな。それに、どうも慣れなくてな」

そう言いながら帽子を直すのであった。

「下した髪型も似合ってますよ？ねえ土方さん？」

「え、そ、その自分は……は、はい／＼／＼」

急に芳佳にふられてしまったが土方は思わず照れながら同意した。

3人は談笑しながらも上官、下士官の雰囲気を作っていた。同じ扶桑皇国の仲間であ

る。そんな中美緒は芳佳にどんなことをしているのかを聞いていた。

「最近はどうな勉強をしているんだ？」

「止血法とかを勉強しているんです」

そんな話しをしている時に芳佳と美緒は土方が運転するジープに乗りながら話しをしていた。

「そう言えば坂本さんはいつまで、ここに居るんですか？」

「ああ、第501統合戦闘航空団が再結成されるまで、ここに居るつもり「キャー！」
どうした？」

近くの公園を通り過ぎようとしたら、悲鳴が聞こえて来たの3人はそこに行ってみた。

そこには、先ほどまで話していたアルテアが居た。しかし彼女はひどく怯えていた。

「アルテアちゃん！」

「芳佳ちゃん！」

アルテアのの前には興奮していたサーカスのシロクマが今にも襲い掛かりそうなくらい興奮しており、仁王立ちしていた。

そして、大きな爪がアルテアに当たる前に芳佳が入り込み、魔法陣で防いだのだ。

「あ、ああ……」

ググーワー！

「キヤー！」

「フン！」

「芳佳ちゃん！・宮藤！」

シロクマはなおも攻撃をやめなかった。それどころか段々と強くなつていくばかりでこれでは手の打ちようがない。

そんな時芳佳はシロクマの口の中にある物を見つけた。

そして、固有魔法である「治癒魔法」を発動するため使い魔である、豆柴を顕現させた。

「大丈夫。もう大丈夫だよ」

芳佳の身体が光り輝くとシロクマは大人しくなり、正気の戻った。お礼として顔をペロペロと舐めだしたのだ。

「アハハ！くすぐったいよ」

芳佳は一連の騒動を調教師である男性に話しをした。

原因はシロクマの口の中に虫歯があり、その状態で鞭を叩いた時に鞭が虫歯に当たり酷く興奮していると言う。

調教師の男性は深く反省して二度と怒らせないようにすると誓った。

そして、アルテアも軽いケガをしていたので治療を施すのであった。その際、芳佳が501統合戦闘航空団通称へストライクウィッチーズのメンバーだったことを告げた。「あのもしかして芳佳ちゃんってウィッチなの?」

「そうだ。宮藤は第501統合戦闘航空団へストライクウィッチーズのメンバーだ」

「ええ!じゃあ…芳佳ちゃん!」

「うえええ!」

アルテアは歓喜の余り芳佳に抱きついた。実はアルテアの父は海軍をしており今は、任務でアントウエルペンへ物資を運ぶ任務の最中だった。

そして、その任務を行えるのはガリアを解放した501統合戦闘航空団のおかげだと言っていた。

ガリア解放のストライクウィッチーズに会えた喜びを、父親に伝えるべく美緒はアルテアに無線を使わせるのだった。

その間、美緒は501統合戦闘航空団を除隊することを伝えた。

「宮藤。私は正式に501統合戦闘航空団を除隊することにした」

「え!どうしてですか!」

「もう20歳も超えて魔法力もない私がいても仕方がないだろ」

「そんな…私もう一度坂本さんと飛び立ったのに…」

「そんな事を言うな宮藤。だがな、新たに2名501統合戦闘航空団に加わる事になったんだぞ」

「え？それは誰ですか？」

「それはな、「お父さん！返事してお父さん！」どうした？」

その時、アルテアの様子が急変した。どうやら通信が乱れて声が聞こえなくなつたようだ。

土方も必死に繋げようとするが上手くいかない。

「どうやら通信障害発生し上手くつながりません…」

「そんな…」

「…きつとネウロイです。坂本さん至急501に出勤要請を出してください」

「無茶を言うな。大体本当にネウロイが現れたかどうかも分らんのに、おいおいと出勤要請を出せるか」

「そんな…」

そんな事を言っている間にどんどんと状況が悪くなっていく。無線の向こう側からは「冰山が…」と言って無線が切れてしまった。

芳佳は居ても立っても居られなく単独で向かうと言い出した。

「坂本さん！私アントウエルペンまで飛びます！」

「何！」

「私アルテアちゃんのお父さんの所に行きたいんです！お願いします！私、守りたいんです！」

「守りたいか…フハハハハ！よく言った。それでこそ宮藤だ！」

「しかし、少佐。我々はストライカーユニットを装備しておりません」

「なに、心配するな。いい所を紹介してやる」

その頃、ヴェネツィア海軍 リットリオ級戦艦「ドージエ」に乗船している アルテアの父カルロ・グリマーニは驚愕していた。

目の前に居る巨大氷山が自身の戦艦「ドージエ」に向かって来ているのであった。

「おのれ…全砲門開け！目標前方の巨大氷山！」

「全砲門発射準備完了！」

「砲撃開始！」

ドコーーン！ドコーーン！

ドージエから放たれた重量885kgの砲弾は巨大氷山に命中した。しかし、ビクともしなかった。

「艦長ダメです。ビクともしません！」

「ぬう……」

その頃芳佳達4人はヘルウエティア空軍基地に向かっていた。そこには、万が一の為に購入していたユニットが存在すると美緒から説明があった。

そのユニットを受け取り空軍基地に向かっていた。さっそく空軍基地に到着した芳佳はストライカーユニットを受け取るのであった。

「いや〜お待ちしておりました！自分マイヤー整備兵であります。まさかあの501のお役に立てる日が来るとは〜」

基地の奥に案内された4人が待つていたのは、クモの巣が張つてあるポロポロのユニット（ヘルウエティア製ストライカー）一基だった。

マイヤーが叩くと尾翼の一部がポロツと取れてしまった。このユニットでは無理だと知った美緒は芳佳に行くのをやめる様に説得した。

しかし、芳佳は行くと言い出し、発進するのであった。

「発進！」

使い魔である豆柴を顕現し、芳佳は大空へと飛び立った。

しかし、左のユニットが不調を起こした。魔導ポンプが詰まっていたのだ。これを知った美緒は激怒した！

しかし、芳佳は持ち前の魔法力でポンプ詰まりを直して再び安定した飛行をした。それを見終えた美緒と土方はある事をしていた。

「うわあわわ！何このユニット！」

「宮藤！」

「しまった！あのユニット魔導ポンプが詰まっている！あの様子だと魔法力の半分も出せないぞ」

「ふざけるな！」

「芳佳ちゃん！」

「大丈夫です！」　　パアアア！

「すげえ。あの子持ち前の魔法力で直しやがった…」

「全く、宮藤には驚かされる…我々も行くぞ」

「はっ！」

芳佳はボロボロのユニットでアントウェルペンの海に居るドージエに向かのであった。

ガリア共和国　　ディジョン基地

ここにはリベリオン合衆国陸軍航空隊所属　シャーロット・E・イエーガー大尉とロ

マーニャ公国空軍所属　フランチェスカ・ルッキーニ少尉がいた。

2人はかつて501統合戦闘航空団で活躍していたエースパイロットだった。

2人は遠くの空に現れた飛行機雲を除いていた。

「うーん」

「シャーリー、シャーリーどつたの？」

「あの飛行機雲ウイッチじゃあないか？」

「そうだね…」

「どこの部隊だ…」

ガリア共和国 セダン基地

ここにも501のメンバーが同じ様に空に浮かぶ飛行機雲を除いていた。ガリア共和国自由ガリア空軍所属 ペリーヌ・クロステルマン中尉とブリタニア連邦空軍所属 リネット・ビシヨップ曹長だった。

「あの飛行機雲ウイッチかしら？」

「変ですね。今日はどこも出撃命令は出でいませんね…命令違反ですかね？」

「そんなの、あの人だけで十分ですわ」

「そうですね」

ベルギガ王国 サン・トロント基地

カールスラント軍人3人衆はこの基地に在籍していた。帝都カールスラント空軍所

属 ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐、ゲルトルート・バルクホルン少佐、エーリカ・ハルトマン中尉である。

「どこの部隊だ？」

「アントウエルペンへの飛行計画は出ていなかったわよ」

「誰か脱走したのかもね」

「お前がここに居なかつたら、私は直ぐさまアレを追っていたぞ」

「それよりもトウルデー、どうするヨハネスの件」

「…今はその名前を出すな。頭が痛くなってくる」

「そうよね…」

3人はもつか目の上のたん瘤であるヨハネスの件をどうしようか悩んでいた。

オラーシャ帝国 リバウ基地

スオムス空軍所属 エイラ・イルマタル・ユータイライネン中尉とオラーシャ帝国陸軍所属 サーニヤ・V・リトヴァクは向かい合って座っていたが、エイラが難しい顔をして趣味であるタロットカードを見ていた。

「ウーン」

「どうしたのエイラ？」

「占いの結果ニ宮藤が飛んでいるツテ占いがデタンだけど…」

「芳佳ちゃんはヘルウエティアの学校に居るはずだよね？」

「そうなんだガナ……」

そんな中、芳佳はアントウエルペンを抜けて海上に出た。

美緒からの情報だと、アルテアのお父さんはリットリオ級戦艦「ドージェ」に乗っていることが分かった。

しかし、通信状態が悪くなりつながらなくなった。

そして、遙か先では戦艦と巨大氷山が戦っているところが見えた。

芳佳が巨大氷山近づくとき突然赤いビーム光が飛んできて突然の出来事にびっくりした。

そして、冰山自体が反転すると、ネウロイの様な触手が生えてきた。

「そんなーネウロイは水が苦手なはず！」

訳も分からず、呆然としていると第2波が放たれた。芳佳は自慢の魔法壁で防ぐのでいっぱいだった。

□□□□□□□□

一方、ヨハネスはガリア共和国で優雅にティータイムと洒落こんでいた。昨年501の活躍によりガリアは解放されて人々の活気があふれていた。

「うくん…：セーヌ川を見ながら飲む紅茶は最高ですね。ここに本があればなお良いのですが、余り悠長な事は出来ませんね」

ヨハネスは昨日の一件がありお尋ね者扱いになっていた。『人々に恐怖を与えたウィザード』『恐怖の大王』など呼び方は様々だが、いいイメージではない。

その為早めにガリア共和国を旅立つ必要があった。

「仕方ありませんね。名残惜しいですが「いたぞ！奴だ！」やれやれ…」

ヨハネスはお茶代とチップを置き、ストライカーユニット『メッサーシュミット M e 2 6 2 飛行脚』に両脚を装着する。

すると、ヨハネスの使い魔である「ジャーマンシヨートヘアード・ポインター」の垂れ耳と短いブラウン色の尻尾が出てきた。

「コンタクト!! (エンジン始動)」

バババババと回転するフォックケウルフ F W 1 9 0 飛行脚のプロペラを回すのであった。そして、追っ手を躲して空へと旅立つのであった。

「うん。今日もいい動きですね。それじゃあアデュー!」

一路第 5 0 1 統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」が駐屯している、ネーデルランドへ向かうのであった。

オペレーション 03 「結成ストライクウィッチーズ」

くあらすじく

扶桑のウィッチである宮藤芳佳はヘルウエティアで医学学校への短期留学をしていた。そんな中彼女の学友であるアルテアに対して自分が第501統合戦闘航空団通称「ストライクウィッチーズ」のメンバーである事を告白した。更に坂本美緒少佐が20歳を超えたことによりストライクウィッチーズを除隊する旨を伝えた。

そんな中アルテアの父カルロ・グリマーニ率いるヴェネツィア海軍が「氷山に襲われている」との連絡を受けたのを最後に通信が途絶えてしまった。危険を察知した宮藤軍医少尉は単身ドージエがいるアントウエルペンを抜けて海上に居るドージエに向かうのであった…

そこには、氷山型ネウロイとアルテアの父が乗っている戦艦「ドージエ」がいた。しかし、ネウロイは芳佳に攻撃を集中させてきた。

「このままじゃあ、いくらネウロイの攻撃を防いでも私の魔法力がなくなっちゃう…」
ウィッチ化には魔法力がある。それが尽きると動け無くなってしまふ。それはシ―

ルドやユニットを動かす力になる。そんな芳佳を援護するかの様に戦艦「ドージエ」は氷山に砲撃を行っていた。そして、後方のデツキから芳佳はドージエに着艦した。

「あのウイツチは回収したか？」

「ハイ」

「よし、我々は引き続き氷山型ネウロイの攻撃を行う。あのウイツチを艦橋へ連れて来てくれ」

「了解です」

後方のデツキに着艦した芳佳は整備兵にストライカーユニットを任せると、アルテアの父が待つ艦橋へと行くのであった。

「貴女がウイツチですか？」

「はい。第501統合戦闘航空団「ストライクウイツチーズ」所属。宮藤芳佳です」

「ヴェネツィア海軍 リットリオ級戦艦「ドージエ」艦長 カルロ・グリマーニです」

「アルテアちゃんのお父さんですか？」

「アルテアを知っているんですか!？」

「はい、お友達なんです」

「そうなんですか…」

「アルテアちゃん心配していましたよ。突然連絡がつかなくなったって」

「すみません。あの巨大なネウロイによって、通信が出来なくなったので…」
「そうでしたか…」

アルテアとの通信が出来なくなったことはわかったが、予断を許さない状況には変わりない。その時、状況が一変した。何とネウロイがドージュエに対して攻撃をして来た。

ドコーーン！

「至近弾！右舷後方に着弾！」

「キューーイーイン！！」

「くっ！取舵一杯！最大船速でアントウエルペン港には近づけるな！それと、付近のウィッチーズに連絡をしろ！」

「了解です！」

「あの！私が出ます！」

「しかし、宮藤軍医少尉殿はさっきまで戦っていたのでしよう。そんな身体では無理です」

「けど、じつとしていられないんです！皆さんを守りたいんです」

「お気持ちは嬉しいですが、私達はウィッチを、ましてやアルテアの友達を失いたくないんです」

「…」

「おい、宮藤軍医少尉殿を格納庫へお連れしろ」

「はっ！」

「ならせめて、シールドでガードだけでもさせてください！」

「…わかりました。しかし、無理はしないでください」

「了解です」

そう言つて、扶桑皇国海軍式の敬礼をして艦橋を出て行つた。外に出た芳佳はドージエに着弾しそうなビーム光を自慢の巨大なシールドで防いでいた。

ドージエは対ネウロイ装甲をしているとはいえ、全てを防いでいるわけではない。芳佳のシールドでも防ぎきれない物がありそれが着弾し小規模ながら爆発した。

「左舷損傷！」

「第一主砲損傷！付近より火災発生！」

「消火急げ！」

こんな状況を見た芳佳はやっぱり自分が注意を引かないといけないと思ひ、ボロボロのストライカーユニット（ヘルウエティア製ストライカー）を装着しに後方のデッキに向かうのであつた。しかし、整備はまだ終わつておらず、とても飛べる状況ではなかつた。

「やっぱり私が注意を引かないと…」

「すみません！出ます！」

「このボロボロのストライカーユニットでかい!?」

「はい！」

「馬鹿野郎！今出て行ったら君はやられてしまうぞ！」

「じゃあどうしたらいいんですか！」

「…あと5分くれ。その間にできる限り整備をしておく」

「分かりました！」

そして、5分後。整備班の必死の整備により、いくぶんマシになったストライカーユニットを履いて芳佳は出撃するのであった。

「中央エレベータ作動！」

「なに！誰だ出撃するのは！」

「宮藤軍医少尉です！」

「何だと！」

そこには、ボロボロのストライカーユニットと九九式二号二型改13mm機銃を手にした芳佳がいた。

「発進！」

上手く発進は出来たが、やはり付け焼き刃程度の整備では、直ぐにバランスを崩して

しまう。

「うわつとつと！」

あわや海面と激突する時に何とか立て直しすぐさま攻撃を開始した。

「行かせない！」

しかし、九九式二号二型改13mm機銃では心もとない。そんな時、港湾基地からの砲撃音が鳴り響いた。

ドコーーン！ドコーーン！

だが、ネウロイに変化が現れた。触手と思っていた箇所が離れ、一つ一つの飛翔体となって港湾基地を襲撃し機能を停止させた。周囲の要塞や戦艦からの攻撃をものともせずに向かってくる強力なネウロイを、芳佳は倒すことができるだろうか？

「こんな時あの人達がいてくれたら…」

芳佳が絶望になりそうになった時、突如として10基分のストライカーユニットの回転する音が響いた。

「あ、あの人達は！」

そこには、9人のウィッチと1人のウィザードの姿があった。彼女達こそ第501統合戦闘航空団通称「ストライクウィッチーズ」と孤高のウィザード「ヨハネス・鷹野」その人だった。

□□□□□□

芳佳の救出に向かう40分前。

ヨハネスはガリア共和国で優雅にティータイムを済ませた後、ネーデルランドへ向かう蒸気機関車に乗った。その途中誰からか通信が入って来た。

「うん？ 秘匿回線？ はい、こちらヨハネス・鷹野。貴官の名は？」

『相変わらず硬い言い方ね。ヨハネス・鷹野。それとも「孤高のウィザード」さんとも言った方がいいかしら？』

「…その声はミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐でお間違えないでしょうか？」

『いかにも、私は501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」所属ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケです』

「それで、中佐殿がわざわざ私に連絡して来た理由は？」

『単刀直入に言います。現在、ベルギカ王国のアントウエルペン海上にて巨大な氷山型ネウロイが出現。501統合戦闘航空団のメンバーである宮藤軍医少尉が交戦しています。我々501統合戦闘航空団は、急遽部隊を再編し宮藤軍医少尉の援護及び氷山型ネウロイの撃破殲滅を行います。』

「それで、その作戦に私も加われとでも仰るのですか？」

『話しが早くて助かります』

「はあ…やれやれ、もう少しゆつくりとしていたかったのに仕方ないねミーナ。了解したよ」

『ありがとう。ヨハネ』

「気にするな。大切な幼馴染の頼みだ」

『た、大切って／＼／』

「それで、現在のネウロイの場所は？」

『ええ…』

そう言つてミーナは氷山型ネウロイの場所を連絡し他のウィッチにも同様の連絡をしていた。ヨハネスは機関車の貨物車両に行くとストライカーユニット『フォツケウルフFW190飛行脚』両脚に装着する。

ヨハネスの使い魔である「ジャーマンシヨートヘッド」の垂れ耳と短いブラウン色の尻尾が出てきた。

「コンタクト!!（エンジン始動）」

そう言つとバババババとフォツケウルフFW190特有のプロペラ音が鳴り響いた。そして、13mm MG131機関銃を2挺、懐にナイフ2本と護身用の愛銃「モーゼルC96」を装備して、ミーナが連絡して来た場所へと飛び立った。

「いい動です。それじゃあ行きますよー」

その頃ミーナから連絡を受けた元501統合戦闘航空団メンバーはポイントα52地点で集合していた。

「ねえトウルーデ。ヨハネの奴来ると思う？」

「知らん。ただミーナが連絡をしている所を見ていたから、恐らくは来るだろう」

そんなぶつきらぼうな態度に対してハルトマンはニヤニヤしながらバルクホルンを見るのであった。

「ふ〜ん」

「？何が可笑しい？」

「いやトウルーデってよくヨハネの事心配しているんだと思つてね」

「な！／／／」

少しだけ凶星な事を言われてバルクホルンは黙ってしまった。更にハルトマンは続ける

「そう言えば昔ヨハネが扶桑に行った時、ずっと泣いていたのはどこの誰だったけなあ
〜」

「ハルトマン！／／／」

「アハハ！トウルーデ顔真つ赤！」

「この〜！」

2人が遊んでいる時に他のメンバーもそろいつつあった。

「悪い！遅れた！」

「ルツキーニ少尉参上！」

「ごきげんよう！ピエレッテIIアンリエット・クロステルマン参上いたしましたわ」

「リネット・ビシヨップ着きました」

「サーニヤ大丈夫か？」

「…ありがとうエイラ。大丈夫よ」

「これで全員かしら？」

9人のウイッチがそろったがミーナは動こうとしなかった。なぜならあと1人のウイザードを待つていたらだ。

「おい、ミーナ。これで全員なんだろ。早く宮藤を助けに行こう！」

「落ち着いてトゥルーデ。もう1人来るはずなんだけど」ピーピー

ヨハネスを待つている時にミーナへ連絡があった。ヨハネスは少し時間がかかるといい、先に行くように指示していた。

「はい、こちらミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐…え？先に行ってくれ？わかりました」

ヨハネスから連絡を受けたミーナは皆を芳佳の元へと向かうように指示した。その事にいち早く気付いたのはバルクホルンだった。

しかし、ミーナは悟られないようにはぐらかす素振りをした。

「ミーナ。今の連絡は誰からだった？」

「何でもないわ。それでは冰山型ネウロイの撃破殲滅及び宮藤軍医少尉の援護に向かいます」

『了解』

ミーナを先頭に皆は芳佳の元に向かうのであった。そして、冰山型ネウロイを肉眼で確認できた距離に来た時、もう一人のプロペラ音が聞こえて来た。

「何だこの音は？」

「新手ですか？」

「はあ……全く遅すぎよ」

そこには、愛機『フォックケウルフ Fw 190 飛行脚』を履き 13mm MG 131 機関銃を 2 挺抱えてカールスラント軍服に身を包んだヨハネスが現れた。全身黒色のコートを覆われて頭には灰色の将校用制帽をかぶり胸には騎士鉄十字章が輝いていた。

「遅参。すみませんでした」

最初に驚いたのはペリーヌであった。リーネに関しては「っひー！」と小さく悲鳴を上

げていた。

「だ、誰ですのこのウイザードは！」

「私はカールスラント空軍 第1戦闘航空団「ヨハネス・鷹野」と申します。以後お見知りおきお」

「久しぶりだなヨハネス」

「お久々ヨハネ〜！」

「お元氣そうで何よりです。バルクホルン少佐。ハルトマン中尉」

「ナンダ知り合いナノカ？」

「ええ、昔馴染みと言いますか、何と言いますか…貴女達は？」

そう言つて、軽い自己紹介が始まつた。

「エイラ・イルマタル・ユージェイライネン。階級は中尉だ」

「…アレクサンドラ・ウラジミールヴナ・リトヴァク中尉です」

「シャーロット・エルウイン・イエーガー！大尉だ！」

「フランチェスカ・ルツキーニ！少尉だよ！」

「ピエレッテ・アンリエット・クロステルマン。中尉ですわよ。ヨハネス・鷹野大尉」

「…リネット・ピシヨップ曹長…です」

「なるほど、あなた方が聞きしに勝る第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチー」

ズ」メンバーでしたか。会えて光栄です」

「お喋りはそこまですてちょうだい。ヨハネス・鷹野大尉」

「了解です。ミーナ中佐」

そう言つて、ミーナとの会話を終了するとサーニヤが1000m先で交戦している芳佳を発見した。

「：十二時の方向。目標まであと1000m」

「了解。それでは作戦開始します」

「目標を肉眼で捕捉。それではいきますか。『E s i s t Z e i t z u j a g e n!（狩りの時間だ!）』」

ヨハネスは一気に魔法力を増強させ、プロペラを更に回転させる。両手に持った13mm MG131機関銃のトリガーにかかる指に力が入る。そして、ネウロイに対して攻撃を行うのだった。

そこからは芳佳も加わった11人で交戦するのであった。芳佳には親友であるリーネが駆け寄り励ますのであった。

「芳佳ちゃん!!大丈夫?」

「リーネちゃん!!うん!大丈夫だよ」

「よかった」

「お喋りはそこまでですわよ。先ずはあのネウロイを撃破しませんと」
『はー！』

そう言うとりーネ、ペリーヌ、芳佳の3人で1組のチームとなり、側面より攻撃を行うのであった。

対するネウロイは触手を一つ一つの飛翔体に変えて、飛ばされた。それを確実に処理しているのがミーナとヨハネスだった。

ミーナの「三次元空間把握能力」とヨハネスの正確無比の射撃により次々に撃破されていく。

「やるわね。ヨハネス！」

「伊達に腕は鈍っていませんよ」

そんなカールスラントの2人に負けじと同じバルクホルンとハルトマンも続くのであった。負けず嫌いのバルクホルンだったがそれをハルトマンが飄々とした気分で躲すのであった。

「やるな2人共…私達も遅れを取るわけにはいかないぞハルトマン！」

「え〜トウル〜デ熱すぎだよ…」

「なにおう！大体だな…」

そんなやり取りをしていると、2人の所にネウロイの触手が一つ飛んできた。それに

全く気がつかない2人。あわや撃破されそうになった時ヨハネスが防いでくれた。

ドコーーン！

『あ！』

「2人ともよそ見禁止ですよ！」

「す、すまん……」

「ごめんなさい……」

「はあく私で良かったものの、ミーナだったら鉄拳制裁ですよ」

『ひっ！』

思わず2人は頭を押さえるのであった。だが、それで許すヨハネスではなかった。

「まあ私も許しませんからね。帰ったらオ・シ・オ・キですからね……」

『は、はい……』

そんなやり取りをしているとルッキニーとシャーリーのコンビがネウロイの正面に立ちコアを探していた。しかし、巨大な氷の壁に阻まれてなかなか難しい。

「うにや〜〜！固いよシャーリー！」

「確かに私達じゃあ無理だ……エイラ、サーニヤどうだ？」

『……こちらサーニヤ。ダメ右側面にはない模様』

『コチラエイラ。ダメだナ左にもないナ……』

「ちくしょう…ミーナどうなっている?」

「落ち着いてシャーリーさん。今考えているわ」

「でも、そんな事をしているとアントウエルペン港に着いちまうぞ!」

「分かっています。コアは何処に…」

ミーナが探している中、芳佳とリーネはある部分に注目していた。その部分だけ赤く発光していた。

「うん?」

「どうしたの芳佳ちゃん?」

「あそこだけ赤く光っていない?」

「え?...あ、ホントだ!」

「ねえ、リーネちゃんあそこ攻撃できない?」

「うん。やって見るね!」

そう言うのとリーネはボーイズMk. I対装甲ライフルを構えてその部分を狙撃した。

そして、見事氷を貫通させコアを露出させることに成功した。

「あ!コア発見!」

「芳佳ちゃん!」

「うん!うおおお!」 ダダダダダダ!

九九式二号二型改13mm機銃をフルオートで発射させ、見事コアを打ち抜いた。

そして、ネウロイは四散し白い結晶となった。

「やったー！」

「お見事よ。宮藤さん！」

「はい、ありがとうございます。ミーナ中佐！」

しかし、喜びもつかの間。ネウロイは倒したがそれを覆っていた冰山は港に向かっていった。

それを止める様に全員が冰山に向かって攻撃をしていた。

ドドドドドド、バシューー！

サーニャのフリーガーハマーが当たるが効果なし。ついにアントウエルペン港の目の前まで来てた。これ以上の攻撃は無意味だと判断したミーナは退避するように呼び掛けた。

「くっそー！」

「総員退避！」

ウィッチ達の攻撃虚しく冰山はアントウエルペン港に激突。「戦いに勝って勝負に負けた」と言う結果になってしまった。

そんな中芳佳のユニットは限界を突破しついにユニットから火花が出て脱げてし

まった。当然空中に居た芳佳はそのまま海へと落下してしまった。

「うん？」バ：バババ：ババ：

ボン！

「う、うわああああ〜」

「芳佳ちゃん！」

「落ちる〜」

そこをヨハネスがお姫様抱つこの様に受け止めて間一髪のところであつた。

「よつと！大丈夫ですか？」

「あ、はい…」

「このままアントウエルペン港まで運びます。少しの間ですが、辛抱してくださいね」

「は、はい／＼／＼（男の人だよね…）」

そして、アントウエルペン港に着くと氷山の被害によつて港の機能は完全に麻痺していた。そんな中501メンバーはある場所に集まっていた。

そこには、第二種軍装の坂本美緒少佐もそろっていた。そして、ミーナが今回の招集と今後の作戦について説明するのであった。

「皆揃ったようですね。まずは、501統合戦闘航空団ですがカールスラントの首都ベ

ルリン解放を目的として再結成が連合総司令部より連絡がありました。今後はネーデルランドの基地に戻りオペレーション「ロード トウ ベルリン」を発動します!」

ベルリン解放を目的とした501の再結成。そして、新たに加わるメンバーの紹介となった。

「また、坂本美緒少佐の除隊に伴い、2名の501に加わります。まずは、この人です」
そう言つてミーナは第一種軍装に身を包んでいる、少女を紹介した。キリつとした目に黒髪のポニーテール。如何にも扶桑皇国海軍っぽい出で立ちの彼女は、緊張しながらも自己紹介をするのであった。

「は、はい!扶桑皇国海軍兵学校所属、服部静夏(はつとり しずか)と申します!階級は少尉!誠心誠意努めて参ります!」

「服部はこう見えて私が指導した中では、ピカ一だからな。大いに期待しているぞ」
「は、はい!」

そう言つて扶桑皇国海軍式の敬礼で返礼するのであった。そして、もう一人の紹介をするはずだった:

「そして、もう一人は…あら?」

「ああ、奴なら荷物を取りに一旦帰ると言つて、出て行つたぞ」

「そう…彼にはネーデルランドの基地で自己紹介をしてもらいます」

そう言って、皆ネーデルランドの基地へと向かうのであった。しかし、芳佳だけは明後日の方向を見ててぼーっとしていた。

「芳佳ちゃん大丈夫？」

「リーネちゃん……うん大丈夫だよ」

「そう、ならいいけど」

「うん！」

こうして、アントウエルペン港の攻防戦は終わったのだった。

（かっこよかったなあ／＼／＼）

□□□□□□□□

ヨハネスは隠れ家としていた家にいた。ここにある全てをネーデルランドの基地に持つて行くために荷造りをしている所であった。

「はあくゆつくり出来ると思っとたらネーデルランドに行く羽目になるとは……」

トランク5つ分になる荷物をどう持つていくか思案している中ある疑問が頭の中をよぎった。

（それに、いつまで飛べるかわからないからな……）

そう、彼は19歳になったばかりだが20歳になるとウィッチやウィザードは徐々に魔法力が低下していく。最悪の場合ストライカーユニットを履くのも無理になってく

る。

「まあ、飛べなくなつた時はただの人間になるだけですわね……」

いつか言われた師匠の言葉を胸にヨハネスは荷造りをするのであった。